氏　　名	：	安久津　太一
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 275 号
学位授与年月日	：	平成２８年３月１５日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	フロー理論に基づいたヴァイオリン集団学習の実践的研究 Applying Flow Theory to Japanese Children's Group Violin Learning
論文審査委員	：	（主査）　教授　竹澤　栄祐 （副査）　教授　浅沼　　茂　　教授　蛭多　令子 教授　本多佐保美　　教授　筒石　賢昭 教授　池内　慈朗　　（國學院大學）

学 位 論 文 要 旨

フロー理論は，社会心理学者チクセントミハイが，人が現在の瞬間に夢中になって没頭している経験を分析し体系化した理論である（Csikszentmihalyi,1990; Nakamura,J & Csikszentmihalyi,M., 2009)。コロンビア大学教育学部のカストデロは，フロー理論を音楽教育分野の実践に応用し，「音楽活動のフロー観察法」(Flow Indicators in Musical Activity)を創案した(Custodero, 1998, 2005)。本論においては，音楽活動のフロー観察法(FIMA)を援用し，ヴァイオリン集団学習のフィールドで学習者一人一人がヴァイオリンや教材，他学習者，指導者と相互に関わり合う中で経験するフローを観察･分析し，知見を反映させて，ヴァイオリン集団学習の実践を開発することを研究の目的とした。

本論が採用した研究の方法は以下の通りである。第一に，墺クイーンズランド大学のバレット等が提唱する，音楽教育のナラティヴ研究のアプローチを採用した(Barrett, 2009)。Barrett は，音楽教育分野のナラティヴ研究を，単に言語的な語りを超える，音楽活動を通じてこそ「語られる」事象に意味付けする作業として，「響き合いのナラティヴ」（Narrative soundings）と呼称している。具体的に本論では，筆者自身が初学者として参加した教育学部のフルート授業を通した予備的調査を皮切りに，2 才児，5 才児，小学校 1 年生，3 年生を対象としたヴァイオリン集団学習それぞれの実践で観察されたフローに着眼して，複眼的な検証を行い，ナラティヴを構成した。そして，フロー観察法に準じた分析を通して，学習者一人一人のフローが，音楽的環境との関わり合いの中でどの様に発生して変容し，学びを促進しているかプロセスを検証した。

第二に，アクションリサーチとして位置づけられる本研究においては，研究から得られた知見を随時反映させて，フローに着眼した新しいヴァイオリン集団学習の実践開発を行った。特に，教示が介在しない余白の時間に学習者がヴァイオリンと関わる様子の自然観察や，異なるヴァイオリン学習環境下での観察を組み合わせることで，フローを喚起するヴァイオリンの活動を多面的に検証し実践開発につなげた。最終的に，幼児･児童を対象としたヴァイオリン集団学習の実践モデルを掲示し，応用研究として中学校のヴァイオリン集団授業の実践を通した省察を行った。

本論の構成は以下の通りである。第 I 部では，筆者自身の米国での 10 年間に亘る音楽演奏と指

導の実践を省察し，音楽が内在する関わり合いの性質と，そこに介在するフローについて，理論と実践の連関にまつわる問題意識と課題を深めた（第１章)。そして予備的調査として，筆者自身が初学者として参加した国内の教育学部のフルート授業，さらに筆者が指導者として参与観察した，東京近郊の小学校の放課後クラブにおける，児童のヴァイオリン集団学習の実践を通して，他学習者，教師，音楽との関わり合いの中で，学習者一人一人が経験するフローが変化･変容するプロセスを概観した（第２･３章)。

第Ⅱ部では，幼児･児童のヴァイオリン集団学習の観察を通して，子ども一人一人がヴァイオリンと出会いフローを経験するプロセスを，先行研究の知見と対比させながら検証した。観察には，カストデロの観察指標(FIMA)を援用し，研究協力者等との連携により，複眼的にナラティヴの構成を行った（第４･５･６･７章)。最終的に，横断的な事例の分析を通して，観察指標毎のフロー経験の特徴を示すと同時に，フローが顕著だったヴァイオリン集団学習の活動を整理して示した（第８章)。

第Ⅲ部では，研究の知見を反映させて，フロー理論を応用したヴァイオリン集団学習の実践開発を行った。幼児及び小学校低学年児童を対象としたヴァイオリン集団学習の実践モデルを開発し「レッスンプラン」としてまとめた（第 9 章)。さらに，中学校におけるヴァイオリン集団授業を実践し省察した。筆者は音楽科教諭と協働して実践を開発すると同時に，幼児･児童の事例では得られなかった記述を通した省察を通して，中学生が初めてヴァイオリンと出会い，仲間と演奏をする中で経験するフローを検証した（第 10 章)。

本研究を通して，ヴァイオリン集団学習において学習者が経験するフローは，他学習者や指導者，ヴァイオリンや音楽との，相互の関わり合いの中で持続的に喚起され変容していることが明らかにされた。実践的研究を通して，個々の学習者が音楽の学びの関わり合いの中で瞬間的に経験する喜びや，自己目的的に取捨選択した課題や挑戦を，フロー理論の枠組みを持って，認識して育むことで，ヴァイオリン集団学習の新たな実践の開発が可能となった。個々の学習者が経験するフローは，決して自己完結的に発生するのではなく，常に他者や音楽との相互の関わり合いの中で表出している。フロー理論に基づいたヴァイオリン集団学習が，学習者一人一人における多様な学びを育むと同時に，個々の学習者が抱く，音楽を通して他者と関わり合うことへの渇望を保証することが明らかにされた。さらに，ヴァイオリン学習で観察されるフローを検証することで，ヴァイオリンに特化した固有の器楽集団学習の意義が明らかにされた。